昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十九年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一八七号）

慈光

第十六巻　第十一号

目次

『教行信証』大信海釈（四）……近角常観……(1)
人生問題と信仰（一）……福島政雄……(8)
仏陀のおしえ……金児黙存……(18)
『鳥』――愚と大愚……榊原徳草……(20)

『教行信証』大信海釈（四）

近角常観

一一

さてかくの広大の信心海の故、次には

「唯是れ、不可思議　不可称　不可説の信楽なり」

実に口にも言葉にも、何とも言つて見ようなき絶大なる御哀れみである。『和讃』には

いつつの不思議をとくなかに　仏法不思議にしくぞなき

仏法不思議ということは　弥陀の弘誓に名けたり。

ここになると我々は、最早、不思議のお慈悲を、唯不思議と信ずるの外は無い。……『末灯鈔』には又

「誓願をはなれたる名号も候わず、名号をはなれたる誓願も候わず候。かく申候もはからいにて候なり。ただ誓願を不思議と信じ、又名号を不思議と一念信じとなえつるうえは、何条わがはからいをいたすべき。聞きわけ知りわくるなど、わずらわしくはおおせられそうろうらん、これみなひがごとにて候なり。ただ不思議と信じつるうえは、とかくの御はからいあるべからず候。云々」

実にこの者のため着せようと、態々一枚の手織りの着物をこしらえて下された親の親心も不思議なれば、下さる着物もまた不思議である。親心の仏の誓願も不思議なれば、下さる名号の着物も不思議である。でまる〳〵仏智不思議の御哀れみと、初めてその遣る瀬なき思召しに頭が下り、その広大の御親切を親しく身にまとわせて頂くと、

五濁悪世の有情の　選択本願信ずれば

不可称不可説不可思議の　功徳は行者の身にみてり

そのお慈悲を頂いた味いは、弥々もつて言葉も心も絶え果てた不思議である。人生における奇蹟の宗教は、唯世間一応の不思議を言うだけのことならば、何も左程驚いて目を見張るにも当らぬが、蓮如上人は法敬坊が、六字の名号が焼けて六体の仏と御なり候を、如何にも不思議であると申したに対して、

「それは不思議にてもなきなり。仏の仏に御なり候は、不思議にてもなく候。悪凡夫の弥陀をたのむ一念に、仏になることこそ不思議よと、仰せられ候なり」（御一代聞書）

南無阿弥陀仏の六字の名号が焼けて六体の仏となり給うたは、仏が仏になり給うたの故、一向に不思議でもない。

が、この罪深き悪凡夫の、このしてみよう無きを、か程までに捨てぬとある広大の思召しが実に不思議である。故にここになると「能くも〳〵かかる者が可哀想であるとの、遣る瀬なきお慈悲なりしか」と、言葉も心も絶え果てて、南無阿弥陀仏々々々と、思い出すたび毎に喜ばせて頂くの外はない。法然聖人の御歌には、

阿弥陀仏というよりほかに津の国の
　難波のことも　あしかりぬべし

又『和讃』には

弥陀大悲の誓願を　ふかく信ぜん人はみな
ねてもさめてもへだてなく　南無阿弥陀仏をとなうべし

返す〳〵も不思議広大の御哀れみであります。

一二

そこで次には

「喩えば阿伽陀薬の、能く一切の毒を滅するが如し。如来誓願の薬は、能く智愚の毒を滅するなり」

阿伽陀薬という薬は、如何なる毒でも一切の毒を消し滅す薬である。今仏の広大不可思議のお慈悲は、如何なる毒、罪でもこれを消し滅して下さること、丁度阿伽陀薬の如くであるとあります。これはよく気を着くべきことは、此の仏の御恵みは、往々人の言う如く「罪ありてもよい、障りありてもよい」と、罪や障りをそのままに置きながら、上から臭い物に蓋をする如く、その者を救い取つて下さるというお慈悲ではない。罪有れば罪を滅し、毒あれば毒を滅し、借金あれば借金を消失させて救つてやろうとあるお慈悲である。

で御同よう凡夫の手前より言う時は、如何にも「煩悩を断ぜずして涅槃を得」とお示し下され、こちらより煩悩を断とう、妄念を払おうと骨折るではなけれども、これを仏よりお知らせ下さる時は、信の一念に「横ざまに四流を超断す」とある。又『和讃』のお示しには

罪障功徳の体となる　こおりとみずの如くにて

こおりおおきにみずおおし　さわりおおきに徳おおし

かく毒、罪のあればあるだけを、悉く大悲の心で解き滅し救うとある広大のお慈悲なのであります。而してその我々の毒の中にも色々の種類がある。

「自分はなか〳〵分つて居る」

「自分ばかりは善いことして居る」

と思うは是れ智慧の毒である。必ずしも雑善雑毒のにがいものばかりが毒と限らない。中には

「自分は大分わかつてきた」

という甘い方の毒もある。斯く智も愚も共に毒である。故に又自分の愚を以て誇りとしてもならぬ。人間はすべて

することなすこと冨貴も毒なれば貧窮も毒、学問も毒なれば、栄達も毒である。かく毒のかたまりで出来上つた人間八万四千の毒で満ち充ちたる我々である。である故に

「その毒で閉じられている汝が可哀想である。その心の浅間しいのが如何にも哀れで見て居られぬ」

と、その毒を転じて薬として下さるお慈悲である。たとえば氷をとかして水となす如く、悉く我々の智愚の毒をば照らして大慈大悲の水と変えて下さるが、遣る瀬無き如来大悲の信楽なのであります。で『和讃』の御化導には、

弥陀智願の広海に　凡夫善悪の心水も
帰入しぬればすなわちに　大悲心とぞ転ずなる。

ここは皆様に是非よく気をつけて聞いて頂き度いのであります。

でこの広大の信仰の上からは、実際上、今まで悪人、人殺しと思われていた人もその振り上げる手の下から、哀れと眺めて下さるお慈悲の為に、再び手を下すことが出来ぬようになつてしまうのである。又善い方で言えば私共平素これなら大抵に親孝行が出来てる〳〵と、自分が一つ角、親孝行していることに目をつけ、自分は善いことを知つている〳〵と言うて居るのであるけれども、第一その知つたは誰のお陰であるか。又その自分の居る所は、誰の下されたものであるかとなるに、自分のものとて何一つ無きに、一つぱし自分が偉そうに思つていたは、大なる間違いであつたと謝り果てるようになる。こは智慧の毒を滅して下さるものである。

で、かく御同よう、今まで自分の僅かばかりの小善を頼み、善いの悪いのと言つているのであるが、一朝夜が明けて見ると、今まで光りがあると思うていた電灯も、唯一面の明るみである如く、善いも悪いも唯このお慈悲一つで助けられるので、このお慈悲の前には、我々の善いが必ずしも善いでなく、悪いが必ずしも悪いでない。『歎異鈔』の御教化には、

「聖人の仰せには善悪の二つ、総じてもて存知せざるなり。そのゆえは如来の御こころによしと思召すほどに知りとおしたらばこそ、よきを知りたるにてあらめ、如来のあしと思召すほどに知りとおうしたらばこそ、あしさを知りたるにてあらめど……。」

我々の善いと思うているも、畢竟自分の計らいにすぎぬ。仏の真によしと思召す通りに、かか自分に出来てるものか。又悪しというも、その悪い心のどん底まで知り抜いて、その者を捨てぬとあるお慈悲に遇わせて貰うたのであるから、その悪いがお慈悲のために浮んでしまう。かくて善いも悪いも皆浮いてしまうて、我々の是非善悪は、仏のお慈悲の前には何等の力もなさなくなる。

又聖徳太子『十七憲法』の第十条には、

「忿を絶ち瞋を棄て、人の違うを怒らざれ。人皆心有り、心各々執るところあり。彼是なるとき彼非なり。我是なるとき彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理、いずくんぞ定む可けんや。云々」

我々人のことを善し悪しと言うているのであるけれども、自分のことを聖と思うているから、人が愚と見えるようになり、人を是とするから自分が非と見えるようになる。畢竟共にこれ五分々々の凡夫のみ。今の『歎異鈔』の続きに

「……煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとこそ、仰せそうらいしか。」

一朝、ぐわらりと夜が明けて見ると、全面ただもう遣る瀬なき南無阿弥陀仏のお光ばかり。かくして今までの電灯も瓦斯もみな光力を失い、我が身はどうなるかというに、『和讃』結末のお示しには、

是非しらず、邪正もわかぬこの身なり
小慈小悲もなけれども　名利に人師をこのむなり。

まことに広大なるお恵みであります。

一三

なお今の『和讃』結末の中のお示しには

「よしあしの文字をも知らぬひとはみな
まことのこころなりけるを
善悪の字しりがおは
おおそらごとのかたちなり」

かく頂き来ると、私など烏滸がましくも親鸞聖人の『御本書』など講本にそなえ、かれこれ、善し悪しの文字を知り顔に申し来りしこと、誠に慚愧の至りであります。一文字も知らぬ人が、一字一字お慈悲の塊りと頂かれるこそ実に有難きに、皆さんによく聞いて貰おうなど、是れまことに名利に人師をこのむもの。聖人の悲歎述懐には

小慈小悲もなき身にて　有情利益はおもうまじ
如来の願船いまさずば　苦海をいかでか渡るべき

この浅間しき身をもつて、斯く一週間にわたり、聖人のお言葉を無遠慮に頂き来りしこと、まことに文字知り顔に、名利に人師を好む風情、無慚無愧、浅間しき極みであります。全体この『御本書』は、古来より成る可く拝見せぬように言われてあるほど尊まれてあるお聖教である。勿論全然見ないと言うではなけれども『御本書』を読むというは余りに恐れ多き故、これを講ずる時には、昔より『御本書』を見ると言わずに、六要を読むと言いならわされて

ある程の聖教である。然るにかく横着にも『教行信証信巻三心釈』と題して長々とお話させて頂きたこと、聖人に対し実に申訳なきことと思うことであります。さりながら御在世の時に、既にこれを書写してお弟子に御渡しなされたようでもあり、又女にはこれを延べ書きにして、殊に御肉身の覚信尼公にお与えなされたようにて、覚信尼公の御書状のはしに

「師父聖人、かねて御記念に残し下しおかれ候広文類の御伸書、誠に序く、披き奉るたび毎に、身の嬉しさ、心の涼しさ」

とある。その断片今に歴々存してあることでもあれば、幸にこれを御縁として、聖人直き〳〵の仰せに皆様に直接に接して欲しさの余り、かく潜越をも省みず、これを題として一週間の間拝読させて頂きたことであります。

で今回は之をもつて講義の最終席といたし、明日はいよいよ法主台下格別の恩許を蒙りて坂東報恩寺所蔵の親鸞聖人直筆の御真本を、御同よう拝観させて頂くことである。聖人御真筆と称する『教行信証』はなお他にもあるのでありますけれども、私はこの報恩寺所蔵のものに限ると思うことであります。親鸞聖人が特別の恩典を蒙り、法然聖人の『選択集』の御製作を書写なされ、そのことを『御本書』の末文におよろこびなされたお言葉に、

然るに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰し、元久乙丑の歳、恩恕を蒙りて選択を書く。同じき初夏中旬第四日、選択本願念仏集の内題の字、並に南無阿弥陀仏、往生之業念仏為本、と、釈綽空の字とを、空の真筆をもつて之を書かしめたまいき（中略）本師聖人今年七旬三の御歳なり。選択本願念仏集は、禅定博陸八月輪殿兼実、法名円昭〉の教命によつて、選集せしめたまう所なり。真宗の簡要、念仏の奥義、これに摂在せり。見る者諭り易し。誠にこれ希有最勝の華文、無上甚深の宝典なり。年を渉り日を渉り、其の教誨を蒙るの人千万なりと雖も、親と云い疎と云い、この見写を獲るの徒甚だもつて難し。しかるに既に製作を書写し、真影を図画す。これ専念正業の徳なり。これ決定往生の徴なり。よつて悲喜の涙を抑えて由来の縁を註す。慶しい哉、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の衿哀を知つて、良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜弥々至り、至孝弥々重し。

親鸞聖人が『選択集』の見写をお喜びなされたお言葉が即我々明日『御本書』の御真本を拝見せしめらるる所の喜びであります。

殊に聖人は法然聖人に、僅に内題の字、並に南無阿弥陀

仏往生之業念仏為本、と、唯是れだけ書いて頂いただけでこれだけお喜びなされたに、我々は明日、面の当り『御本書』全部の御真筆に、親しく恐尽して拝観するを得ることであります。而して聖人は、今の『御本書』末文に、続いて、御本書御製作の思召しを御披瀝下されて、

「茲に因つて真宗の詮を鈔し、浄土の要を撰う。唯仏恩の深きを念じて、人倫の嘲を恥じず。若し斯の書を見聞せん者は、信順を因と為し、疑謗を縁として、信楽を願力に彰し、妙果を安養に顕さん」

斯の書を信ずる者には、その信順を因とし、もし疑い謗る者ある時は、その疑謗を縁として、疑う者も、謗る者も、遂にはすべてお慈悲の中に引き入れ、遣る瀬なき願力の力を示して、安養界の妙果に到らしめんとあるが、聖人の本書御選述の思召しである。かくして聖人は、読いて『安楽集』の御文をお挙げ下されて、

「安楽集に云く。真言を採集し、往益を助修せしむ。何となれば、前に生るる者は後を導き、後に生れん者は、前を訪い、連続無窮にして、休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽さんが為の故なり」

親鸞がこの書を書き遺すは、これで前に生れたものが、後に生れたものを導きて、弥陀の願海に入らしめんがためである。かくして生れかわり死にかわり、先なる者は後を導き、後なる者は前を訪い、連続無窮にして、無辺の生死海を尽したいとの遣る瀬なき思し立ちなのであります。再々申すことなれども、又『唯信鈔』結末の御示しには、

「これを見んひとさだめてあざけりをなさんか。しかれども信謗ともに因として、みなまさに浄土にむまるべし。今生ゆめのうちのちぎりをしるべとして来世さとりのまえの縁をむすばんとなり。われおくれなば人にみちびかれ、われさきだたば人をみちびかん。生々に善友となりて、たがいに仏道を修せしめ、世々に知識としてともに迷執をたたん。」

或はここにお集り下されてある皆様の中でも、昨年の求道会にお出で下された方で、今年はすでにおいでない人があるかも知れぬ。又今年遇わせて貰うた我々と雖も、来年ははかられぬこと故、「今生夢のうちの契をしるべとして来世さとりの前の縁を結ばんとなり。我おくれなば人に導かれ我さきだたば人を導かん云々」ここに於てか私共も、今生夢の中の契をたよりとして互に聞法の縁を結び、四海の全兄弟、唯この一道によりて、広大の浄土に往生し、

「大小の聖人、軽重の悪人、皆同じく斉しく選択の大宝海に帰して念仏成仏すべし」（行巻）

の味いを実現したいと思うことなのであります。しかるに私共、何等の幸ぞ、親鸞聖人のこの遣る瀬なき御念力が現

れて、次第相承の善知識の恵みの下に、親しくこの広大のお慈悲を承るを得、昨年はことに聖人の六百五十回忌に遇わせて頂くことを得た。よつてこれを御縁に、昨年来本会を思い立ち、昨年は信巻開巻より、この三信釈に至るまでを講本として、片言まじりに、聖人直き〳〵の仰せを喜ばせて頂きたことであります。

しかるに本年も幸に存命して、かく皆様と共に御縁に遇わせて貰うことを得た。来年も長らえて幸に本会を継続するを得ば、誠に有難きことと思うのであります。いよ〳〵これにて一七ケ日講義を終りを結ぶことと致します。南無阿弥陀仏々々々。

第三回夏季求道会　〈三心釈　完結〉

両師を憶う

聚墨生

昭和七年の初秋、池山先生を訪ねますと、先生は「近角さんが脳溢血でたおれてから何時も心にかかつていたが、漸次恢復して遠方の見舞客には面会も出来るときいて、早速見舞つた。ところが病室に案内されるまではあのように縦横に活動し読けた人が突然不自由な身となつてどんなにか淋しいことだろうかと同情していたが、病室に入つて驚いたことには、満面喜びに溢れるという大満足の姿で、不自由な右手を左手で支えながら握手を求め、挨拶もぬきにして開口一番、

〃信界建現々々と狂奔して来たが、今にして、教行信証さえあれば真宗は不滅であると知らされた。又これから思想がどんなに険悪になろうとも、歎異鈔一篇が残りさえすれば心配はいらぬと知らされた〃

との述懐を聞いた、本当に嬉しそうだつたよ」

これが今年から卅二年前のこと。その後五年、近角先生にさきだつて池山先生は亡くなられましたが、先生の最後のお言葉は、微笑を浮べられながら、

「何も残るものはない〳〵。ただ念仏だけが残つてくれる偉いこつたよ、有難いこつたよ」

でありました。今や両師を憶うや切であります。

人生問題と信仰

福島政雄

一　苦悩

この度『人生問題と信仰』という題で、仏教の信仰上、私が平素感じて居る節々を申述べます。実はこの題は私にとつては三十余年前の思い出の深い題であります。丁度私の二十六歳の夏に、近角常観先生からこの題で一週間ほど御話を承りました。その時近角先生は、教行信証の信の巻の阿闍世王の入信の文、即ち涅槃経より引かれてある阿闍世王の物語を根本としてお話がありました。只今その時のことを思い出しながら、同じ問題を私の味いの上から申述べてみたいと思います。

この阿闍世王の入信の文の一番初めに、私どもに非常に有難い親鸞聖人のお言葉があります。

『誠に知んぬ。悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し名利の大山に迷惑して、聚沌の数に入ることを喜ばず真証の証に近づくことを快まず恥ずべし傷むべし矣』

このお言葉は三十余年前から私の心に深く染み込んで居るものであります。又三十余年の間、私の心に、色々に味われて来たのでありました。

元来、私は非常に感傷的な人間でありまして、すぐに物に感じ易く涙もろい性であるために、初めは此の聖人のお言葉を、私の感傷的な気持に合わせる心で味つて居りました。

そのうちに此の聖人のお心持、即ち魂の動きがだん〳〵深く分つて来るようになりました。その後ある人から、親鸞聖人のお言葉の中には感傷的な文句は一つもない。親鸞ほど感傷的な世界を離れた人はすくない、親鸞より日蓮などが却つて感傷的であつた、聖人にはちつともそんなことはなかつた、ということを聞かされました。それからひるがえつてこれをみると、なる程これは私自身の感傷的な心を、そのまま親鸞聖人にうつして、自分の相を見ていたということに気がつきました。

もつとも、聖人の書かれたといわれるものの中にも、感傷的のようなものが無いでもないのであります。

例えば御臨末の御書というのが問題であります。

『……一人居て喜ばば二人と思うべし、二人居て喜ばば三人と思うべし、その一人は親鸞なり。』

このお言葉は、感傷的というか、浪漫的というか、何となくそういう心持が現れたものであります。しかし、この御臨末の御書は親鸞聖人御自身に書かれたものでなくて聖人の御臨末を追憶した人の心持を述べたものであり、聖人の御臨末に即して無限の追慕の心情をあらわしたものであると思われます。即ち後人の追慕の文であつて聖人が直接筆をとつて書かれたものではないのであります。親鸞聖人おかくれの後、それを心から悲しんで、その流れを汲む人として、自分の心持で、自分には親鸞聖人が常住に共に居て下さる、と書かれたものが、この御臨末の御書であります。実際そういう風に解釈されるとき、この御臨末の御書が生きて来る。親鸞聖人が直接お書きになつたものでなく、聖人を追憶する涙の中から書かれたというところにこのお言葉が活きたものとなるのであります。結局、親鸞聖人が直接筆を執つて書かれたものの中には感傷的なものは一つもないと断言出来るのであります。そしてだん〳〵と此の「悲しき哉、愚禿鸞」のお言葉を味いますと、私は、これは親鸞聖人が御自身の有りのままの御相を久遠の御仏の前に打出された有様である、ということがわかるようになりました。自分は斯様々々の悲しみに沈んでいる、そして悲痛の涙を絞つている、というのではなくて、自分は大きな御光に照らされて、その前に生々と現れて来た自分の姿が見える。自分の相の醜さに気がついては、逃げようかくそうとするが、その時自分のその醜い相を徹見して、仏は汝がいくら包み隠しても自分にはよく分つて居る。のみならずお前のその醜い相を自分が此処から見て、そんなことではいけないとも云うのでもなく、又そんな醜い相でよいと言つて居るのでもない、そういう醜い相こそ汝の如実相である。それをどこ〳〵までも悲愍して居るのである。汝のその醜きいのちの底の底までわがいのちをもつて打込んで、汝のいのちをわがいのちとし、わがいのちは汝のいのちと共に汝のいのちが苦しめば共に苦しみ、共に悩み共に悲しみ、汝一人に就いて、どこ〳〵までも汝のいのちを融し尽すまでは、汝と行動を共にするのであるという、この広大な仏の「まこと」が胸にひびいて、それほどまでに広大な仏のまことの前に、親鸞聖人が御自分のいのちのありのままの相を投げ出して、悉く恐れ入つて、自分の醜さを逃避せず、自分の醜さをありのままに静かに視ると ころの眼を、仏によつて廻向されたる聖人のお言葉がこの

『誠に知んぬ。悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくを快まず、恥ずべし傷むべし矣』

の御言葉であります。斯ういう風にだん〳〵味うて来たのであります。

一体私自身のことを考えてみますと、二十数年前に非常に自分の悲痛な境遇を考えたことがありました。唯空に考えるというのではなく、その頃最初に子供を失い、その後半歳ほどして妹や母が相次いで世を去り、悲痛のどん底に落ち、世の中が真暗になつて過した時期がありました。その時の自分を今振り返つてみると、自分が初めて人生の悲痛事に遇つて、自分が感ずる悲痛の心持を振り廻し、人に会つてはその悲しみをもつて誰かに同情を求めようとする。つまり自分の悲痛を売物にして、誰からか人間の同情を求めようと致して居りました。悲痛を看板に提げて居つたものであります。ところがそういう事を致しても、自分のこの悲痛な心持を本当に理解してくれるものは此の世に一人もないのであります。

親を失い子に別れた人は世間にいくらもあるが、人間の一人々々の境遇や事情が違うので、決して同じ心持は得られない。自分が如何に人生の無常を悲しみ、親を失い子の死に遇つても、本当に同情し共鳴して呉れる人は世の中にないのである。自分の気持を打ち明けても共鳴する人は無い、ということが、いくらかづつ分つて参りますと、今度は人生に対して、自分の一種の僻んだ態度が現れてくる。

そうなると今度は反対に、多勢の中で、親を失つた話をしても、わざと笑いながら話す。笑いたくなくても笑いながら話をする。つまり、どうせ世間の人々は自分のこの悲痛な心持を分つて呉れるものでないから、自分の悲痛を誰も信じて呉れないから、こんなものを出してもつまらないからと、わざと笑いながら話すという、一種のねじけた心がずつと読く、決して素直に自分の心を出さない。そんな心持はどちらにしても正しい心持ではないのであります。しきりに人に訴えるのも、又不自然に笑いながら話すことも極めて不徹底な心境であります。

そこで、つまり私というものは、自分の心持を悲痛な心をもつてしきりに人にうつたえるか、又は、笑いの中にごまかして人に話すかで私どもは人間に対する場合、そのどちらかをとるのである。しかしそれは、何れにしても自然な素直な態度ではない。素直な対度はとれない。どちらかに偏した心の現し方をするものであります。そういう風になれは、結局どちらの態度に出たにしても、人間というものが自分の悲しみを懐いて人生に対した場合、人生に対して曲つた心、僻んだ心が自分の中に現れてくるのであります。そしてこの僻んだ心というものは、自分の境遇が悪くなれば悪くなる程、層一層僻んでくるのであると感じてきました。

この僻んでいく心は何処に解決を救めることが出来るかと云うと、何物もたよりにならない、私はどこまでも解決

はつかなかつたのであります。それでこんな態度になつたこともあります。こんな人生に対して自分は素直になれない、けれども自分の煩悩はどこまでも強盛に読いて行くものである。そういう場合に一つの道として、自分の煩悩を制するに煩悩を以てする、という態度になることでした。そういう態度をとつたこともあります。例えば、親を失つたことを悲しんで、この自分の悲痛な思いを人に打明けても駄目だから、結局自分の煩悩生活をもつてこれをごまかそうという心持になつた。

私が母を失い、後に父を失つて、西洋に――主にドイツでしたが――行きました。その西洋に二年間生活しているうちに、ドイツの家庭の若い娘達と知り合いになり、そんな人に親しみ、これによつて、自分が親を失つた悲しみの心をごまかそうと云う態度に出たのでありました。それはそんなことによつてごまかしおおせるかというに、決してごまかしおおせるものではない。自分の生活は益々淋しいどん底に沈んでしまうばかりである。丁度酒に酔つたようなものである。一旦酒に酔うても、すぐ醒めると酒に酔う以前に増してなお淋しくなり、結局、煩悩をもつて煩悩をごまかそうとしたことが、かえつて自分の生活を淋しさのどん底に、堕落のどん底生活にまで陥したのであります。

私は西洋から帰つて来ましてから、こんなことを痛切に感じました。『自分は浦島太郎のような者である』と。浦島太郎は自分の親に背を向けて竜宮へ行つた。そして乙姫を相手に酔うた歓楽の生活を続けて居た。そのうちに浦島の前に一つの幻が現れる。年老いて痩せ衰えた両親の姿が現れて見える。浦島はハッとして『自分は竜宮へ来て乙姫様を相手に楽しみの生活をして居るが、是はごまかしの生活、迷いの生活であつた』と気がついて、乙姫の止めるのを振切つて竜宮から帰つてくる。帰国してみれば何百年かの歳月が過ぎ去つて、自分の両親はもはや居ない。私は西洋から帰つて来て実際そういう感じを痛切に感じました。『この世の中に両親は居ない。自分は浦島の生活を続けて居つた』と思いました。

つまり煩悩をもつて煩悩をごまかそうとするが、結局は駄目である。ごまかし得たと思つた後には一層悲痛な淋しさが現れるばかりであります。そうなつてくると私の心を持つて行く所がなくなつてしまう。

一体私共がそうなつてくるとどうなるか、私どもには家庭がある妻がある子がある。それで家庭や妻や子で慰安を求むべきだと申されるでしようが、それは普通の場合に常識の上ではそういうことも出来ますけれども、いよ〳〵人生に行詰ると、家庭というものが如何なる場合でも慰めになるものではない。実際、人生問題を痛切に感ずると、家

庭生活が自分の本当の慰めになるということはないのであります。

それでその結果は、外に向つて迷いあるく、というようなことになるものであります。しかし私共男性の立場から申せば、妻以外の女に迷つていることは、妻にも迷つて居ることである、妻以外の女には迷うが妻には迷わないと云うかも知れませんが、そうではない。妻以外の女に迷う心は自分の妻にも迷う心である。妻に対して迷う限り家庭生活が治まる道理はありません。要するに外に迷い内に迷う。その生活を続けて居るのである。そうすると、私にとつては、火は外にばかり燃えているのでなく、家庭の中にも燃えているのである。外を見ても火が燃え、内を見ても火が燃え熾つて居るというのが自分の現実相であつたことが解つたのであります。

二　無　自　覚

自分は美しい言葉を使いながら煩悩をごまかし、一つの迷で他の迷を糊塗して居るに外ならないのである。一つの迷を以て他の迷に代えているのであります。問題は、自分は外に向つても迷い、内に向つても迷つている、ということになるのであるから、かような問題は人間の関係においては解決出来るものではないのであります。

そこで私共人間世界において、迷から迷をたどつて居る時、それだからこそ、一足飛びに、仏の世界に安住するのだというけれども、そんなに手つ取り早く片付くものではない。私のような者は、迷えばどん底まで迷つて行く。いい加減で反省することはない。底の底まで行つて行詰れば自分の生活は何方を向いても根抵のない生活である。どちらを向いて見ても自分は救われるというようなことはない。何方へ行つても救われないのであります。自分は到底地獄より外へ落ちるところはない、全く絶望である、と押詰つて来るのであります。私自身は実際そうなのであります。

これについては、私がドイツに居る時に何度も繰返して見たワグナーの歌劇の筋が、私の問題に触れるのでありました。

西洋の中世紀のことであるが――タンホイゼルという騎士が故郷を離れて永い間耽溺した生活をした揚句、はじめて自己の罪悪に目がさめて苦しむ。その罪悪を如何にすべきかということが問題となり、タンホイゼルは悩みの末、はる〳〵ローマ法王の許に巡礼することになる。その時ローマ法王は、手に持つた枯木を地面に立てて示されて言われる。「枯木を見よ、これは再び芽を出すことはない。汝のような耽溺生活をして来た者は未来永劫救いの道はな

いのである。汝は地獄へ落ちて行くより外はない」と。

そしてその最後は聖き女性エリザベートが、命を投げ出し死を以てタンホイゼルが地獄の底に落ちるのを救うた、という筋になつている。

これは西洋のオペラとして面白いもので、普通の西洋人の考とは違つている。普通の考では、タンホイゼルが聖き女性エリザベートの所に帰つて来ると、エリザベートは悦んで迎えて、ここに幸福な結婚生活が始まるというようなことになるのであらう。然るにこれはエリザベートもタンホイゼルも二人共死んで、死んだ後の魂の世界で、エリザベートがタンホイゼルの地獄に落ちようとするのを救うというのである。

私はこのオペラを三度も見て、実に感激したのでありました。そういうところにも、自分の問題が横たわつていると思つたのであります。

此のオペラの結末は全く仏教的で、仏教でなければ解釈されない思想だと思つたのでありました。私は死を通じてでなければ自分の問題の解決は出来ないと思つた。どちらを向いても迷い迷つて行き、結局地獄に向つて落ちて行くより外はない。どうかして〳〵で落ちて行く。その地獄より外に道のない自分をとり止めようとするが、取り止めることは出来ないで、どうしてもずる〳〵と地獄の火の中に真倒様に落ちて行く、人生において、一切の救いは絶え果てる。併し、此時、自分がいい加減にお念仏を申す。そして、そのお念仏の中に救わるるということでは真実の救にはならない。実際自分はどちらを向いても、結局地獄へ真倒さまに落ちるより外に道は無いのである。

親鸞聖人が『……名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証に近づくことを快まず、恥ずべし傷むべし矣』

と、斯う仰せられたお言葉が私の身によく味われるのであります。私というものをもう一歩進んで申しますならば、実は地獄必定の自覚さえもない地獄必定の自分である。自分は地獄必定であると思いつめて居れば問題はないけれども、それは折に触れてのことであつて、私の心は案外ケロリとして平気なところがある。私というものは飽くまで煩悩によつて煩悩をごまかして居る。たま〳〵問題が起きて、私というものが、平素親しくして居る人々から見捨てられはしまいかというようなとき、今更のように自分は恐ろしい奴だと感ずるが、咽喉もと過ぐれば熱さを忘るるという風で、あぶないことが通り過ぐれば元の平気な気持に還る。自分は、何処かで、自分ながら恐ろしい奴だと思う時にはいかにも地獄必定だと感じて居る様であるけれども、又その機会が過ぐれば平気にかえつているのである。

是が私自身の相である。地獄必定などとは思わない、つまり無自覚のままで三界を迷うて行くのが私自身であります。

親鸞聖人は更に進んで斯う仰せられてあります。

『夫れ仏、難治の機を説きて「涅槃経」に言わく。迦葉世に三人有り、その病治し難し。一には謗大乗、二つには五逆罪、三つには一闡提なり。是の如き三病、世の中に極重なり、悉く声聞・縁覚・菩薩の能く治する所にあらず』と。

涅槃経の中から引かれて、世の中に三種の病気がある、その病気の人とは、

一には謗大乗＝正しき道を誹る、正しき道に徹底せる人をそしるもの

二には五逆罪＝父母を殺す、阿羅漢を殺す、和合僧を破る、仏身より血を出す、などの五逆の罪を犯せる者。

三には一闡提＝断善根、信不具のもの。

この一闡提というのが問題であります。

これに続いて阿闍世王の物語があります。阿闍世王という人はどんな人かというに、これはこの三つの中の第二の五逆罪を犯した人である。これについて私どもが考えねばならぬことは、五逆罪を犯すほどの人は、ひるがえつて来ることも亦鮮かである。そういう風な人は悪にも強ければ善にも強いのであるということであります。阿闍世王は父を獄死せしめ、母を深宮に押込めた程の逆悪な事を行つたが、ひるがえるときには非常に鮮かにひるがえつて居るのであります。

その次の一闡提というのが涅槃経にもいろ〳〵説明してあるが、是は一口に言えば、何としても手のつけようのない人である。例えば屍のようなものである。如何な名医も屍は治すことは出来ない。病気の人は治すことも出来るが屍は治すことは出来ない。一闡提とは、つまり、求道心の微塵もない、全く無自覚の、何とも手のつけようのない、例えば屍のようなものである。この世の中に様々の菩薩があつて、その菩薩は色々の心の病を治すが、この一闡提ばかりは治すことは出来ない。もろ〳〵の人には仏性があるというけれども、この一闡提には仏性が微塵もない。全く手のつけようのない屍であり、求道心は微塵もない根本的に無自覚であつて、どんな菩薩でも如何ともなし得ない代物である。この第三にあげてある一闡提こそ何よりも一番問題となるのであります。

これは他人の問題ではなく、私の問題であります。この阿闍世王の物語を見ましても、私は、王はなるほど五逆罪は犯したが、廻心が非常に鮮かであつた。が、さて自分はどうであるか、自分はこの三つの中のどれであるか。そう言われ

たくないし思いたくはないが、結局は自分は一闡提であるということに落着くのである。

斯う言いながら私には自分はまさか屍ではないという心が動く、一闡提ではないという心が動くが、口で申したのでは嘘になつて、一闡提の自覚は分らないのであります。

自分は屍ではない、一闡提ではないと思い、五逆罪には落ちても一闡提ではないと言いたいとは思つても、結局、あたらないと思つて居ることがあたつて居るのである。愈々死ぬる病人は自分は死ぬるとは思つて居らない。よくなる病人の方がかえつて死ぬるのではあるまいかと思う。実は死ぬる人はよくなることのみ思つて死の自覚がない。人間というものは斯ういうものである。自分の如実の相がわからないのであります。

自分は悪いには悪いが、流石にあれほどではないというのが、私の根性である。しかし、あれほどではないと思つてはいるが実は急所に当つている。急所に当つているのに逃げようとあせる。私どもは五逆罪ではあるかも知れないが、一闡提ではあるまいと、丁度病人が明日はよくなるだろうと思いつつ死んで行くように、自分は一闡提ではないと思いながら、結局ずる〳〵と一闡提におちていくのであります。自分の相が分らないところからそうなるのであります。結局私は一生どうして行くかというに、無自覚のまに過していくという事になるのであります。若し自分は無自覚ではないと思うときは、自分をごまかして居るのであつて、ある一時の殊勝らしい自分の気持をとらえているものに過ぎないのであります。

しかし、私は自分は無自覚でないと思つたこともありました。三十余年前、二十六歳の時、七月十一日に近角先生のお話を聞き、清々しい気持になつて法悦状態とはこんなものであるかと思つたことがあつた。夏のことで今の明治神宮の裏手の方には蜩がしきりに鳴いて居る。その声を聞いて迦陵頻伽を連想したり、如何にも自分は一角の信仰に入づたと思つていた。が、しかしよく自分の気持をとらえて見ると或る一時の気分に酔うていたに過ぎないのでありました。

それから十余年の間、人生問題に対して、私の心にそういう心持が往来し、自分は確かに廻心したと思つて居つた。次々に起つて来る人生問題に対して苦しむ時は、自分はああいう風にあの時は廻心したつもりであつたが、実際問題ではなぜこんなに悩まされるのだろうと思つて居つた。それはつまり、悩むか苦しむかしても『自分に信仰がある』と思えば苦しみは無くなると思つた。その過去の法悦状態を偶像化して、或る時はその法悦の境地を本当と思つていた。それが非常に可笑しな事であつたということに後に

なつて気がついてきたのであります。

結局、私は苦しみに遇えば苦しみ、悲しみに遇えば悲しむ。大丈夫の心のつもりでいても何かの問題ですぐぐらぐらする。斯ういう頼りない根性が私である。このたよりないぐら〳〵する心の引続き、その無常のすがたこそ私の自性である。磐石の如く動かない堅い心は私の中には微塵もない。私は徹頭徹尾ぐら〳〵の心の上に立つもので、息を引取るまで無自覚から無自覚をたどり行くものであります。そして時々人間煩悩の毒酒に酔うのであります。そんな時には、愈々苦しみの底に至つて初めてお念仏の世界に触れるのであると申して、そう思うて居りますが、それはお念仏というものを持つて来て、自分の毒酒を製造しているのであります。

自分の人生における如実の歩みはこんな所に慰安があるのではない。何等の修飾のない、何等の幻をも描かない人生の歩みというものは、その無自覚な一歩々々を歩んでいるその歩みのうちに、何かに打突かつてはハッと目が醒める気持がする。又無自覚に眠る。又ハッと気がつく、又コン〳〵と眠つていく。つまり自分の相というものに目が醒めず、眠りから眠りに移つていくということが、懸値のない自分の歩みであり、自分の相である。

そこを親鸞聖人は明快に言われてある。親鸞は斯様々々の自覚に入つて意義ある生活をして居るとは仰せられてない。どこ〳〵までも自分は無意義の生活を続けて居る。実に恥ずべきである、と。そしてこの三種の難治の機をあげて居られる。

自覚ということが自覚にならぬ。一闡提が自分の境地であるということに落ちつくのである。そういうところに落着きたくない自分が、結局そこに落ちていくのである。一闡提になりたくない〳〵と思いながら一闡提に落ちて行くのであります。

親鸞聖人が阿闍世王の物語をお引きになつて居られる中に、このお言葉にふくまれてある御心持が限りなく私にひびいてくるのであります。人生の行路を進んで行くうち、人生問題に打突かつては私は一闡提の自覚もないということを感じてくるのであります。私の心境というものは無限に浅薄なものであることを、次から次へと見せつけられていくばかりであります。そこに、私の中に阿闍世物語が巻きかえし〳〵展開されてくるのであります。

人間が自分の姿というものに眼がさめる。自分の価値を自覚する、自分の値打がわかるということは非常に重大なことであることを数年来考えて居ります。私は感ずるのでありますが、自分がカメレオンのようなものであると思うのであります。カメレオンという動物は、緑の草原に行け

ば緑色になり、樺色のところに行けば樺色に変じ、彼の本来の色はどこにあるか分からない。その居り場〳〵によつて変るのである。私はそれを感ずるのである。それは私自身が修養とか兄弟とか家庭とか色々問題にしている。が自分は修養ということに破れて初めて絶対の信仰に目覚めさせられたのである。けれども絶対他力の信仰も近角先生のお話では、これも限りなき底のあるもので、落ちて行く、もつと掘ればそこに泉がでる。そこに腰を落ちつける。いや、これはまだ底ではない。又掘る。掘ればそこに清い泉が出てくる。破れて、又往く。一つ往けば、又一つ。斯うして無限に行くのが信仰の問題であると近角先生は仰せられました。

これを自分の上に考えて見ると、昨日は今日と嘘から嘘である。まことと思うことが嘘になる。この現実の相を見せつけられ、斯うしていくうちには魂が決定してくるのではあるまいかと妄想して居つたこともあります。私の西洋での二ケ年間の生活を投出してみれば、すべてこれは妄想であつた。周囲の環境や居り場〳〵で変つてくる。緑の中に居れば緑になる、西洋が灰色ならば灰色になつている自分を発見して、自分の魂の現実を悉く裏切られる。自分の浮草のような生命が、次から次へと裏切られていく。ここに魂が据るということは言われないのである。自分は縁次第でどんな間違いでも為しかねないということがよく判る。どこまでも頼りないものであることがはつきりする。

しかし、只一つ、どこ〳〵までも頼りない無自覚の歩みフラ〳〵と限りなき歩みを続ける根抵のない私のいのちの上に、一つになつて共に歩みを運ばるるもの、私の無自覚の途上、私のいのちの中心に飛び込んで私にどこ〳〵までも涙を注いで私と共に働いて下さる生きた力、実際の人生問題にぶつつかるごとに、この大いなるまことのいのちの力というものを感ぜしめられる。忘れ続ける私に、私を目醒めさせようとし、私が苦しめば私と共に苦しみ給い、迷えば私と共に迷い、常に私に入り来つて私のいのちと共に動き給う力、私の上に様々の御縁を通じて活きた力として働き、私を背負つて生きて下さる。この大いなる仏の力が私のいのちに入り満ちていて下さることを感ずるのであります。

未完

仏陀のおしえ

金児默存

世尊（お釈迦さま）がサーヴッティ（王舎城）という邑（むら）においでになつていた時のことである。その邑に正しい道理を知らず世の無常を知らず貪欲に目のくらんだ八十才になる老翁がいた。彼は広大な自分の家敷に、前の正殿・後の御殿・涼殿・温殿という豪壮な建物を建築中で、その完成も間近であつた。老翁は人々を指図しつつ自らこの工事に従事していた。

世尊は智慧の眼をもつてこの老翁をご覧になるに、命はまさに旦夕に迫りつつあり、しかもそうそうとして目前の欲望に駈引かれていそがしく立ち働き、心のゆとりなく身は痩せ衰え、まことにあわれな悲しむべき様であつた。

世尊は常随の御弟子阿難尊者をつれてその門に到つて老翁に語りかけ給うた。『身も心も疲れ苦しいことであろう。今この家を造つているが、此等多くの建物に何を住まわせ何を安らげようとするのか』老翁は答える『前の正殿で賓客をもてなし、後の御殿で自分が住み、ひさしの間には子供達・召使・宝物をおき夏は涼殿に冬は温殿に住む』

世尊『わたしは汝の長い過去の行業をよく知つている。落付いて話したい。ここによき教えがある。それを今なんじに贈りたい。暫く仕事を休んで共に坐して語り合おうではないか』老翁答えて言う『今は大変いそがしい、坐して話し合つている暇はない。後日改めて来るが良い。その時ともに語り合おう。汝の言うよき教もその時きこう』と。

そこで世尊は偈（うた）をおよみになつた。

『われに子あり、われに財ありとて、愚者は汲々として悩み苦しむ。自己すでに自己のものに非ず況んやいかで子をや。愚者にして自らその愚を知るものは既に賢なり。されど愚者にして自ら賢なりと思うは実に真の愚者と言うべし』

と。

老翁は言う『結構な偈（うた）だ。併し今は忙しい。後日改めて来るがよい。その時語り合おう。』と、

世尊は老翁の愚蒙を痛み憐み悲しみつつ去り給うた。処が世尊が未だ遠くに離れ給わぬ内に、老翁のささえ持つた縁（たなき）が自らの頭上に墮ち頭を強打して命を落した。夫人達の哭（な）き叫ぶ悲しみの声は四隣の人々を驚かせた。

一方、邑のはずれにいた数十人の修業者は老翁の家より今帰り来る世尊の姿を眺め近づいて聞いた『いずこより来られたか』と。世尊『たびたびこの邑の老翁の家に到り法を説くも、彼は仏の話を信ぜず無常なることを知らず、今忽然として死んで後世についた』と、かの老翁に教えた偈を示して詳しくその意義をお説きになつた。修行者達は大いに欣び、教えの道を獲ることが出来た。

そこで世尊は、更に偈をお説きになつた。

『たとい終生賢人に侍るとも愚者は正法をさとり得ず。恰も匙の美味を味い得ざるが如し。

たとい一瞬賢人に侍るとも智者は正法を直ちに悟りうる。恰も舌の美味を味い得るが如し。

無智なる愚人は自分に対して仇敵の如くふるまう。悪業（因）を行いては痛苦の果を受く。

行い已りて後悔し、顔に涙を流しその果報をうく、かかる業（因）は善き行いに非ず。

行い已りて後悔せず、歓喜愉悦しその果報をうく、かかる業（因）は善き行いなり。

悪業（因）未だ熟せざる間は愚者はそれを蜜の如しとなす、されど悪業（因）まさに熟するや愚者はその時に至つて苦悩す』と

修業者は重ねてこの偈をきき、ますます信を深め世尊を仰ぎ歓喜した。

――偈は法句経六二～六九偈

長き（永遠の）因果の道理にめざめ叶うことこそが智者のふるまいであり、短き（目前の）因果の道理にとらわれることこそが愚者のふるまいである。前者の賢には近づき難く、後者の愚よりは離れ難い。而も愚者は愚であり乍ら常に自らを賢なりと思い込んで止まない。そして思い通りにゆかぬ身心のなやみの源は実にこの愚にあることを知らぬ。

自分の利益を求めてさまようが如くにしてなす日々の行為は、長き因果の道理からすればやがて自分の身を焼く業火となる悪しき行いである。

しかしその様な日々の行為は、未だ燃え上つて身を焼く程に熟さない内は蜜の如く甘美である。やがて燃え上つて身を焼く程に熟するに至つて始めて苦悩し後悔し涙し哭泣する。

これが自らを賢なりと思い込み短き因果（目前の利益）にとらわれてやまない愚者の相である。

かの老翁の相こそ、かかる愚者の相であり、これぞまた吾々凡愚の相に外ならぬと世尊は説き給うたのである。

× × ×

鳥

――愚と大愚――

朝のラジオ放送で鳥の生活についての話があつたと妻がいう。その話はこうである。

たとえば鶯の巣にホトトギスが卵を産んでゆくということ、この場合ホトトギスは自分でわが児を育てない、他の鳥にそれを強いる、まことにずるい鳥であると言われる。所がホトトギスという鳥は実は一つ卵を産むと次ぎの卵をうむまで時間がかゝるのだそうである、それで次ぎつぎと他の鳥の巣へ卵を産んでゆくことになるのだそうである。

それを鶯は自分の卵と同様に温めて育て上げる、とこういうようになるのである。

こゝにはずるさもなく、義侠心や慈悲とか親切とかいう心情が働いているのではない。人間がこれを見てそんなことを思うだけであつて鳥には自然のまゝにそういう事柄がなんの屈託もなく自由無碍に行はれるというのである。

又、鳥は元来「愚」だとのことである、慈悲も義理も、義務責任などいうものは元から無い、あるがまゝに自らの性情の然らしめるまゝに生き生活し生を営む。

馬鹿である鳥は、与えられたものをそのまゝ消化し、生かせ、すらり〳〵と、たゞ自然法爾に子供を産み、そして育て餌を探しそれをたべて生を完うして死んでゆくのである。

これで思わされるのは、吾々が聖人の「愚身の信心におきてはかくのごとし」と言われる愚身である。いつもこの一句で知らされることは、「愚心」でなくて「愚身」という文字である。聖人の言葉使いは一字一句が身心挙げての吐露であつて、徒らに観念の念からしぼりだした言葉の羅列ではない。吾々が軽々に読み過してゆくのは聖人の御心の底に光る生命の声に気付かぬからである。

「愚身」。何という光彩陸離たる御言葉であろう。唯円房が聖人御自らのお声から聞いたときに、その時の聖人のお姿は、その時の聖人の御手の位置は――私は聖人の愚身とのたまいしお姿を種々想像するのである。或は左手を膝の上に置かれ右手を御胸に軽く当てられて「愚身の信心におきては……」と仰せになつたのではないだろうか。関東の同行達のその時の姿。如来如実の身証体達の至言たる愚身の一語を聞いた人々の姿を思うのである。

榊原徳草

私は鳥の「愚」からこの聖人の金言に思いを馳せるのである。小慈小悲もなき身にて、有情利益は思うまじ、の仰せを御和讃に聞き、如来の善し、如来の悪しと思う程に知り通し得てこそ善悪を語る資格があるが、吾等は凡べてについてそらごとたわごとまことあることなき身であると歎異鈔に於て聞く。吾々が日常おろかであるとか、この慈悲始終なしの金言に接して、そうであると感じ入る心の底には、未だ〳〵五分五分根性のおれが〳〵の対立関係の中で迷い言をもつて受けとつているだけであつて、真の愚身の金言に面接してない感があるのを覚える。親切が届かないとか、こうしてやらねばすまぬとか、それができんので愚かものであり悪人であるとかでお念仏に帰ることが多いのであるが、それではもう一つ愚心のうちでグル〳〵舞いをしているのではないか。聖人の愚身とは、恰もホトトギスの卵を知らぬ顔して営々と育てあげて、吾が子と何の差別もつけぬ鶯のごとく、春来つて百花開き秋来つて万物実るとでもいうような無我無心の心境が聖人の『愚身の信心におきてはかくの如し』の宜言ではないだろうか。

ホトトギスはずるいとか鶯は親切だとか、この世界に屈伸して迷いの世界から一歩も出られない吾等に、『しかるに、仏かねて知ろしめして』かゝる奴めのために願行をこらして名号一つに成就して、この吾等に渡してやりたくてたまらない大御心こそ、虚仮不実と知らしめられ、そらごとゝ感ぜしめられる元手の念仏、これこそ如来の無我無心の大慈悲大威徳であつて、鳥が元来馬鹿であるごとく如来は元来大愚であらせられればこその大慈悲心である。

如来の大悲心が御身に写り映えた御姿、如来海印三昧に入り給うて大悲が御身に印証せられ、それを正受された御姿こそ『愚身の信心』ではないだろうか。

古来から、大愚と号し大拙と称し大病と云い愚堂と号する古聖が禅界に多々あるが、これら禅界の宗匠もまた聖人の愚身の称と共に大いに味うべきことであると思う。

吾々の愚は、たゞそれだけの愚であり、いつかは賢になりたい心根が底に潜んでおる愚である。時を得たら出来はしまいかの意識下の地金にある憍慢のとはしりであつて、それこそ笑うべき愚である。我見我慢の薪から揚るけむりのようなものでこの愚のけむりの元は懈怠という薪でありもえ上つたら邪見憍慢の炎となるのである。この薪と火と煙りの縁にしたがつて千態万様の迷いの姿の果てしなき旅路に彷徨する吾等を、特に憐れみはぐくみ育て上げんと大慈悲の凝り固つたよびかけがお念仏、たゞ念仏して弥陀に助けられまいらすべし、の金言である。

× × ×

法信抄

鳥取県　上杉真証

……近角先生には昭和六年ただ一度求道会館でお話を拝聴しただけですが亡父上杉謙恭（旧姓、無漏田貢）より「人生と信仰」を与えられましたのをきつかけに近角先生の御教を仰がせて頂いて今日までできたことです。

父は学生当時京都で道交寮を作り信仰運動をしたこともあり、その当時の信友も北九州方面で活動していられますその一人、福高教寿先生（福岡県田川郡金田町長浄寺）も近角先生の御徳を慕い、人生問題と信仰の道を一筋に進めておられます。

この「人生問題と信仰」は、徹底した近角先生の御教化がなかつたら味わさせて頂くことが出来なかつたでしよう。今日では、死後だけの救済ではなく現在の救済であると説かれますが、しかしその救済がウヤムヤになり、曖昧になつて不徹底の言葉で終つているようです。こうした時、近角先生の御教が再現されることを願つてやみません。

○　鳥取県　佐々木リウ

我がむねは　何時もさかまき波立ちて
しぶき散れども　ひかりうつれる
逝きし子の心の宿るわが胸に
何時も呼びかけ　大悲しらさる
うつし世の苦難の道は数あれど
みおやと共に　あゆむ　一日

○　京都市　秋田典昭

……今年の夏は今迄になく身体の調子が悪く、学校の勉強は出来ませんでしたが、近角先生の御講話を繰返し読ませて頂きました。又御聖教も床にあつて読ませて頂きました。

そうしたことから〃聞〃ということの重要性をつく〳〵知らされました。又御聖教をもつと〳〵細かに頂くことの大切さも知らされました。

今迄「衆悪の万川帰しぬれば功徳のうしおに一味なり」等と聞かされても、そういうこと、大体こうであろう位に考えていましたが、真に一句一字ゆるがせに出来ぬものであり、譬えというより、もつと直接的なことを意味されていると知らされました。

又、阿弥陀仏の別号として、無量光、真実明、無辺光、平等覚、無碍光、難思議、無対光…とありますが、わざわざ聖人が、色々とお述べになつたお気持に少しでも気づかせて頂き、この頃では、しきりと後に生れたものの幸福を感じさせて頂きます。……

× × ×

あとがき

秋も姿を段々と消して参りました。禅家は『体露金風』とよく申されますが、秋風に紅葉が散って、体があらわになって行く姿にたとえて、仏法の金風にあう者が段々と外の虚飾が払われて真人の体があらわになることを教えられるものでありましよう。

神戸農大の井上善右エ門様が、甲斐和里子女史をたずねられた時、

「九十余りにもなると何事も面白いほど忘れる。右から左へ筒抜けですな。やがて親鸞様のお名前も忘れよう。ところが不思議ですな、そんなに老碌して何もかも忘れるのに、この度こそ間違いなく参らせて頂くということだけ一つが、反対にいよ〳〵はっきりしてくる。これは妙ですな。人間の頭はおそかれ早かれ老碌するから頼りにならぬ。あんたもまだ若いというて、頭を頼りにしていなさろうが、つまらんですぞな」

と朗らかに念仏申しておられたとのこと。念仏の上の体露金風の味いでありましよう。

○

近角先生の大信海釈はこれで終りました十二月には先生の御忌月として「思想の徹底と建現」の御講話を頂きます。先生の御発病直前の福岡市での記念すべき大獅子吼であります。

福島先生の「人生問題と信仰」は、「おしえの実現」から頂きましたが戦後におきまして、宗教書が世に出ました最初のものでありました。香樹院講師が「よくきいて〳〵、仏法気が微塵も無い奴じやと知れるまできけ」と説かれたやうに記憶いたしますが、百八十度に転じられて、更に三百六十度に転入される福島先生の信味を十一月と十二月にかけて信管させて頂きましよう。

金児黙存様は篤学の方でありますが、原始仏教を学ばれながら、そこに聖人のお心を深く感佩していられる方であります。

榊原様がかねて随筆にと云われて頂いて居りました原稿をかかげました。

「法信抄」は青色青色、白色白光、赤色赤色と教えられますので頂きました。

御案内

毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一道会館　法話会。

毎月廿四日、午前午后　教西寺、法話会。

○

人ならば八十路の坂を越ゆらんか
梢まばらに残るもみじ葉

池山先生詠

定価　一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駅上町二ノ八八　花田正夫
印刷人　名古屋市千種区千種町馬走二八　本田政雄
発行所　名古屋市南区駅上町二ノ八八　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十六巻第十一号　昭和三十九年十一月十五日発行（毎月二回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可